
自己中な彼女

由衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自己中な彼女

【Nコード】

N 4 3 3 4 A

【作者名】

由衣

【あらすじ】

転校して間もない高校三年生の稲葉翔次はある日廊下で気にも止めていなかったクラスメートの中居麻希と衝突(?)彼女が一番最初に話しかけてくれた言葉は『痛ったーい...歩けな い!』!しかし彼女学校一の有名な自己中女だったのだ...何も知らない翔次は麻希に振り回され、ついには...!

出会いたくない運命

『つざけんじゃね　　！』

…その大声と同時に壁に何かがぶつかったもの凄い音が一軒家のある部屋からした。

その声の主は少女のようだ。現在午後9時…ちょっと過ぎ。外は暗闇に鎖され、あの声に吠えまくる犬をどこかのおばちゃんが窓からようすを見ていた。少女の部屋の下には自転車を押して歩いてた少年が何事かと顔をしかめて上を見上げていた。

少年の名は「稲葉^{いなば} 翔次^{しょうじ}」この近辺に最近引っ越してきた高校三年。

おつかいを頼まれたのか自転車のカゴにはコンビニで買ったと思われる牛乳が入っていた。見た目はつんつん頭で気が弱いのか、心優しいのか分からない顔をしている。背は高いのだがやっぱりヒョロヒョロしている。

しばらく立ち止まっていると翔次はまた自転車を押し歩き始めた。
…何故乗らないのだろうか…？

日が昇り翌日になった。

あの声の近所に住んでいる生徒が楽しそうに話している。日常茶飯事らしい…。

『お前もあの声聴いたんだろ？』

『あの声って…』

『あれ、稲葉君近いよね？あそこから』

『あつ…ああ！アレね、うん。聞こえた…あのっ何か…ざけんな…って声？』

何が言いたいんだコイツという視線を翔次に向けて話を盛り上げる男子生徒。

『そうそう！！特に昨日のはちょっと語尾が上がってた！』

『ウチね？あの家の前通ったんだけどオマジ汚かった！つか人住んでんの？みたいな？』

『人がいなきや声は聞こえねエよ？』

『幽霊かもね。』

『もつやだ　！稲葉君！アンタの方が幽霊みたいな顔してるわよ

(笑)』

『あのー。結構それ傷つくんですけど…』

小声で訴えかける翔次の言葉は見事！…流された。

「っざけんじゃね　！ネタ」は飽きたので翔次は廊下に出た。

いろんな人でごったがえしている廊下を突き進むと突き当たりで一人の女子生徒とぶつかった。…というか相手が勝手に転んだ。

『きやああ！』

どう見ても演技だろという悲鳴を上げる女子生徒に翔次は

『大丈夫？』とお決まりのセリフをかけた。

目がキョロキョロしすぎだ。

女子生徒はまだその場に座ったまま下を向いている。

嫌いな空気が2、3秒流れて女子生徒は顔を上げた。可愛い顔をしている。

『痛ったーい…歩けな　い！』

女子生徒の名は「中居^{なかい}麻希^{まき}」翔次と同じクラス。

髪の毛を肩のちよつと下くらいまで伸ばしていて、顔は一流アイドル並の美人！しかし…ありえないほど性格が悪い。

人は自己中と呼ぶ。

この二人。これからとんでもないことになる。

出会いたくない運命（後書き）

初めまして

初めて小説書きました！しかも恋愛ものです

私、あんまりそうゆうの書かないんですけど、今回チャレンジしてみました

未熟者ですがよろしくお願いします。（^^・'）

麻希観察

顔を上げた麻希はポカンつと口を開けてこう言った。

『なんだ稲葉君か。』

何を期待していたのか…？麻希はさっさと立ち上がり、スカートのほこりをはらった。

『あれ？歩けないんじゃないの？』

『……………？』

麻希は翔次を軽蔑のまなざしで見つめるとニツコリ笑って何も言わず鼻歌交じりに教室へ歩いていった。

恐ろしい女だ。

それと同時にチャイムが鳴り翔次は気がつけば誰もいなくなった廊下を慌てて走り出した。

麻希の席は翔次の左斜め後。翔次は何気なく麻希を見た。麻希は目が少し寄り目になりながら真剣にペン廻しをしていた。

それはもう真剣に…。

『はい、稲葉！』

『え？』

『いや、え？じゃなくて、早く問題解けよ！』

少し笑い気味に数学の担当教師がツツコミをいれた。黒板には頭が狂いそうな数式がある。

『……………す、いません。あの…聞いてなかったというか…』

先生はため息を吐くと『んじゃ中居』と麻希を指した。

麻希はペンを置くとかったるそうに席を立ち、黒板にチョークでスラスラ解答を書きはじめた。

頭が良い。何故この高校に入ったのか分からない。

書き終えて麻希は席に着いた。そしてまた寄り目になり真剣にペン廻しを始めた。

そんなにペン廻しが好きか？
そんな様子を翔次は一时间ずっと見ていた。

休み時間になりクラスの友達が翔次のところへやってきた。

『お前何さつきボケーとしてたの？』

『つてか後見てたからさあ、麻希見てたんじゃねえ？』

『ウツソ　！似合わない；』

『ちよつとそれどういう意味ですか？』

『でもさ…麻希はやめた方が…いいと……』

『うんうん！俺も思う』

『別にそういう意味で見てたんじゃ……』

『あ、でも見てた事は認めんだね？』

『あの女に騙された奴結構いるんだよね。』

『そうそう！てゆーかココにその馬鹿いるし！』

『うるせー黙れ（笑）』

『へえ　』

『つてか何稲葉君関心してんの？』

『男としてこの道は通っておくべきだよなあ？』

『オメーぐらいだよ引つかかる奴！』

『何？稲葉君麻希狙い気味？』

『いや違うつて……』

『おい！男として……』

『はいはい分かりました！…でどうなの？』

『いやだから……』

流れる会話に割って入ったのは麻希だ。

『あのさあ』

沈黙の嵐。

『稲葉君に用事！』

『……どうぞどうぞ、女王様。翔次王子をお連れくださいませ。』
男子生徒がふざけた。

『え、ちよつと…。』

本気で焦る翔次。麻希は翔次の腕をつかむと教室の外へと連れ出した。

皆は小声で『気を付けろ!』と叫んでいた。

麻希観察（後書き）

今回は会話だけです。
内容がおかしいかも……；

お誘い…実は？

『何何何？』

翔次は麻希に腕を引つ張られ屋上に連れて来られた。

そして翔次を自分の前に放り出すと『ねえ』と話し始めた。

『今日暇？』

『え？』

『だから、今日の放課後暇？』

『……うん、別に用はないけど……』

言いかけたところで翔次はハツとした。

そうだ…コイツはあの自己中女！放課後に呼び出されたりなんかしたら…何されるか分からない……！！

しかし前を見るとニッコリとした顔で麻希が立っていた。

『あ、あのさあ……』

『言っただよね？』

『は？』

『暇って！』

『別に用はないと言っただけで……』

『-用はない - - 暇 - なの……！！』

『あ、はい。……って…そのオ』

『じゃあ4時ね！』

『え、何が……』

『駅で待つてるからね』

『いや、だからさ』

『んじゃ！そういうことで、絶対来てね』

強制的な別れを告げた麻希は一人屋上を下りていった。

教室に着くとクラスの誰もが翔次の所へ駆け寄って来た。

『何された？』

『何って…』

『なんか言われた？』

『4時に駅に来いと、、』

『うつわ　！キタ　　！！！！』

『え？何が？』

『麻希がゴキゲンに教室戻ってきたからさ、』

『何かあるとは思ってたけど…』

『デートの呼び出しとは…』

『デート？』

『しかもただのデートじゃないよ…地獄のデート』

『何それ。』

『んま、とりあえず財布が底を尽きるまで金を使わされるデートだよ』

『ってことは…』

『あきらめな翔次。コレがお前の運命だ。』

『かわいそ　　！がんばってね』

『あ、ちよつと』

『いいよな。女は気楽で。』

『ま、麻希の獲物になるのは男だけだしな。』

『そんな男子の孤独な会話を背に女子は『プリ撮ろっ！』だの『カラオケ行こう？』だのずいぶん平和なコミュニケーションが繰り広げられている。』

『……………が、こんな女の世界だって結構ドロドロしている。』

『なあ。淡路は中居に一回捕まったんだよなあ？』

『口を開いたのは翔次だ。麻希の捕らわれの身となった淡路に声をかけた。』

『ああ』

『そうそうこの単純馬鹿！』

『そんな時…何された？』

『おいおい、楽しみを聞き出すのか？お前は…』

『頼む！教えてくれ！』

『土下座100回！！！！』

すると翔次が席を立った。

『いや、ホントにやるなよ！（笑）』

『ね、一生のお願い！』

『そこまでして知りたいか』

『うん』

淡路は時計を見た。

『待て。10分で話せる内容じゃない。帰りん時教えてやるよ』

『う…おう！』

そんなすごいのか。

翔次は期待と不安の入り混じった返事をした。

昼休みに入った。

『……………お前…アレだよ』

男子生徒が牛乳を飲みながら言った。

『何？』

間の抜けた返事をする翔次。

『中居に狙われてんぞ。きつと』

『狙われてる？』

『うん。だっていきなりデートのお誘いだぜ？あの女にしちゃあ結構珍しいよ』

『いつもはどんな感じ？』

『一ヶ月くらいその男に付きまとい、ココ！ってときにデートに誘うんだよ。ま、デートといってもただのパシリ喰らうだけだな』

『じゃあ俺って』

『多分…好きなんじゃない？』

『え？』

『中居さ、好きな奴には速攻行く奴だから』

『…そうなの？』

『気にすんなよ！あんな奴彼女にしたら一生後悔するぞ？』

翔次はなにやら変な顔をしている。

『ほら、ただ気が弱そうだから別に付きまとわなくなっただっていいとかかもしれないだろ？』

そう言っていると男子生徒は『ズズツ』と牛乳を飲んで去っていった。

俺のこと？

翔次は一人その場に立っていた。

お誘い…実は？（後書き）

何かコレってラブコメディみたいだ…

次話は淡路君（翔次のクラスメート）と麻希の悲劇のデートを書きます

一応楽しみにしててください…

淡路の恋物語

帰り道　　。

翔次は淡路と話していた。

『　で、聞いたかったのは中居のことだろ？』

『そうそう…あ、あとさ、お前一ヶ月くらい付きまとわれた？』

『ああ、そうだな』

何で俺だけ…。

『確か二年の初めくらいか？』

これは過去にあった淡路と麻希の話。

淡路は理科室に向かうため、一人廊下を歩いていた。

荷物が多かったせいですぐに筆箱が落ちそうになる。

階段を降りて行く途中とうとう筆箱が手元から落ちた。筆箱は階段を歩くようにスムーズに落ちていく。

それを追い、急いで階段を降りた淡路は持っていた教科書・ノートなどをすべてばらまいてしまった。

やばい…

淡路が必死に散乱した荷物を集めていると、横から細い綺麗な手がノートを持って現れた。

『あ…』

顔を上げると短い三つ編をした女子生徒が可愛い顔でノートを差し出していた。麻希だ。

『はい』

『あありがとう』

麻希は片手で家庭科の教科書などを持ちながら散乱した淡路の荷物を一緒に拾っていた。

そのとき、予鈴のチャイムが鳴る。

『遅れちゃうよ…』

『うん！今度から気をつけてね』

『あ…わかった』

淡路は少しにやけながら理科室へ向かった。…がノートに挟んであったレポートがないことに気づく。

淡路は慌てたが突然後から声がかかった。

『淡路君！』

振り返ると麻希が立っていた。

『レポート、忘れてるよ』

麻希の手にはレポートが握られていた。

『ごめん（笑）』

淡路はレポートが見つかったことよりも麻希に名前と呼ばれた方が嬉しかったのだ。

馬鹿だコイツ。

それからというものの麻希は休み時間になってからクラスの違う淡路のところへやってきてた。

『淡路君。この前貸してもらったCD忘れちゃったの！今度でいい？』

『いいよ！いつでも』

『ありがとぉ あとさ、メルアド教えて』

『うん』

『じゃいつでもメールしちゃうね』

淡路は夢を見ているようだった。

こんな優しくて可愛い娘とメール交換できるなんて…だがそれも夢で終わるのだ。

麻希から送られてくるメールは決まって

ウチ今欲しいモ カゝあノレゝ

モウ誰カゝ買 ー！！

す！！レゝカゝワレゝレゝー” <” + ‘w+”

（ウチ今欲しい物があるのゝもう誰か買ってー！！すごい可愛い

バッグなんだ」

というギャル文字満載。

淡路はギャル文字が理解できず、「そうだね」という答えしか返せない。

その度、「答えになつてない」と顰蹙をかうのだ。それが重要なことだった場合はもっと困る。

淡路が物理のレポートが終わっておらず、焦っている最中麻希から

牛勿王里 ポール 糸冬わ +||?

(物理のレポート終わった?)

などというメールが届いた。

もちろん淡路にとつては嬉しいことだが(麻希は頭が良い)このギャル文字が分からない。

とりあえず【?】がついているから質問しているのだと分かり、【そうだよ】と訳の分からないメールを送り返した。

メールだけではない。学校にいたって

『きのオクロちゃんが脱走しちゃってエ…やばいのオ』

とギャル文字ならず麻希語が繰り広げられる。

自分の私生活を喋っているのかテレビのことなのかまったく分からない。

だいいちクロちゃんて何なんだ。

淡路はそんなこんなでとりあえず恋人気分で付き合っていた。

そんな五月のある日

『渋谷行こ』

と麻希が言い寄ってきた。

もしか…デート?

と変な妄想をはたらかせた淡路は二つ返事でOKした。

……悲劇の始まりだ。

休日に二人は駅で合流し、そのまま電車で渋谷に向かった。

車内でも麻希はメールに没頭している。脇からは【テテく】という文字が見える。

例のギャル文字だ。

『あ、あのさ』

『え？』

『その暗号みたいな文字は何？』

『え　　！淡路くん知らないの？』

『ごめん』

『クク…いいよ知らなくて（笑）』

その方が面白いというように麻希はメールを続けた。

アナウンスが入り、電車から下りると麻希の悲鳴が聞こえた。

『きゃあ！』

見ると麻希のブーツのヒールが折れていた。

『あああ！大丈夫？』

『どうしょ　　！靴なきや歩けなあ　　い！』

『あ、じゃあどつかで靴買ってあげるよ』

『本当？ありがとう』

この女狙ってる。

7000円のブーツを買わされた淡路は次に

『ねエ見てみて！コレ可愛いよ　　！』

と洋服店に連れてかれた。

そのピンクのＴシャツをしばらく見ると麻希は

『だめだ高つかい…』

とため息を吐いた。

そのあまりにも残念そうな顔を見ると淡路は財布を覗き込み

『いいよ！買ってあげる』

と笑顔で言った。

『3200円です』

どうやらブランドものだったらしい。

もう淡路の財布は小銭たちが身を寄せ合って震えている。淡路の手も震えている。

『あ……このブローチ欲しい』

淡路はドキッとした。もう金はない。

すると麻希はその店に入り、財布から万札を取り出した。

金あんじゃん！！！！

その財布の中にはまだ綺麗な夏目漱石たちが精悍な顔つきで並んでいる。

啞然とする淡路の前で麻希は

『お待たせ』

と財布を振り回しながら店から出てきた。

すべてが終わった。今この瞬間。

夕方になり我が町に着いた淡路は麻希に向かってこう言った。

『ごめん……別れよう。……いや、君は何も悪くない。ただ……』

『……は？』

麻希は顔をしかめた。

『元々アンタと付き合った覚えなし』

そう言つと『じゃね』と手を振り家へと帰っていった。

短すぎた恋。あの『はい』とノートを差し出す麻希はいなくなっていた。

『まあ……こんな感じだな』

『どんな感じだよ！すごい初恋じゃん』

『うん！まったく今日は夢の早帰りだっつーのに災難だなお前』

『……あ！あと一時間ぐらいしかねエ……！』

翔次は走り出した。そんな翔次に淡路は

『金だけは払うんじゃないね　ぞ　……！！！！夏目漱石と野口英雄は

大事にしまつとけ　……！！』
と叫んだ。

淡路の恋物語（後書き）

ギャル文字が疲れました。
ってかあつてないと思う。

というわけでギャルのみなさん確認ヨロシクお願いします。

悪夢のデート

時刻は午後4時15分。

いつもの町並みが並ぶ駅前。

翔次は一人突っ立っていた。とにかく突っ立っていた。

この15分間携帯も手いじりもしないで、横に手を置き突っ立っていた。

通りかかる人は一瞬

うおっ！びっくりした…マネキンかあ……あれ？人だった

などという感想を抱き、平然とした顔で通り過ぎていった。

『お待たせえ』

ああ待ってましたよ。午後4時20分。麻希は小走りやってきた。お前絶対急ぐ気ねエだろという笑顔で翔次に話しかける。

『あんねエ…準備してたら財布ないの気づいてエ…やばかったのオ！』

アンタはお金たくさん持つてるんだから財布くらい大事にきなさい。

『へえ…見つけた？』

『うん！なんとか』

『いくら持つてんの？』

『え　　？聞きたい？』

『聞きたい』

『いくらだと思っ？』

『いくら？』

『ご想像にお任せします』

質問したのに質問で返ってくる麻希に翔次は呆れていた。

『もうんなコトどーでもいいから早く行こ！』

答えてください。

麻希は翔次の腕を掴むと走り出した。

まずはゲーセンへLet's go!そこには数々のUFOキャッチャーが並んでいた。

麻希はすぐさまキティちゃんが入居している機会に向かって歩き出した。

それはすべて俺の自腹？

『採れないかもよ?』

『え?稲葉君コレ採ってくれんの?』

ゲツ…しまった!

相手はただ目標を見つめてるだけであって攻撃の命令を出していない!

『ちょー嬉しい』

『ハハハ…じゃあ一回だけ…』

『私、このリボンのか・な・り欲しい』

待つてくれよ。それは必ず採れと同じ意味じゃ…しかも位置的に難しいぞ…

百円を四回奈落の底へと突き落とし、機械の合図を待つ翔次。

『よっしゃあ　　!来い!!!!!!』

こーなりやヤケだ。

『がんばれ!稲葉君!!』

【- -(1)のボタンを押してね- -】

『お安い御用!』

もう翔次はバカの壁を半分乗り越えている。

【ウィ　　ン】

当たり前のように外れた。

『ああ…もうちよつとだったのにイ…』

『残念!残念!おしかったね。さあ帰ろう!』

翔次はその場を立ち去ろうとした。

失敗万歳!あきらめてくれ!

が、不意に後ろから誰かに掴まれた。振り返ると麻希がいる。

『……何ですか？』

麻希がニヤッと笑う。

結局ゲーセンでUFOキャッチャー七回と、プリクラ三回、合計で3400円を使い果たした翔次は、淡路と同じように、小銭たちを震え上がらせた。

『いや、君達は何も悪くない…ただ、英雄が…』

『何言ってるの？稲葉君。』

『いや？別に…』

『ああ　私おなか空いてきちゃったなあ…』

『へーそう、じゃ早く帰ろうよ』

『……………』

麻希が冷たい視線で翔次を見つめる。

『はい、どこがいいの？』

『え　いいの？』

へっよく言うよ…

翔次たちはハンバーガーショップに寄り、休憩した。

時刻は午後7時45分。

やっと帰れると思った翔次に更なる試練が待ち望んでいた。

悪夢のデート（後書き）

ずいぶんと遅くなりましたが、五話が完成！！
大して誰も待ってないけど…

そんなワケで次話はデート後編（？）です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4334a/>

自己中な彼女

2010年11月17日02時50分発行